

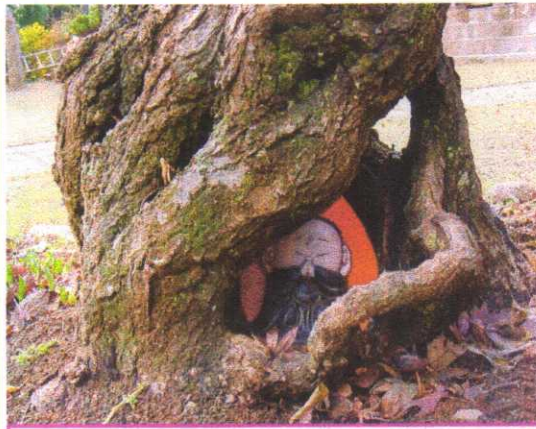
ほとけの混和会だより

平成二十九年二月

東光院

仏の混和会

第125号



世間の荒波も、苦しみも、悲しみもみな御仏の導き「南無」と生きる。

苦しみのお陰で仏に成る

「人は何の為に生きていくのか」と言う、この度の課題に対して、初回から「人は仏になる為に生きていく」などと結論を申し上げてしまい、この書面を読んで下さって居る方は、さぞ困惑して居られる事と思います。

よって、釈尊の生き方から「仏」とは何なのか仏の境地を目指し「菩薩」として生きるにはどうしたら良いのか少しづつ探って見たいと思います。

今から二千五百年ほど前インドに釈迦国と言う国が有りまして、その国の王子は誕生されてまもなく、お母様を亡くし、

人に言えぬ寂しさを旨に秘めながら青年期を迎えます。

そして身近な人々の老いや病、更に死に直面し、自らも苦しみや悲しみを経験されて「この苦しみをどのようにとどまほぐしたら良いのか」などと、何時も人々と共に救われる道を求めて思索に暮れて居たのです。

その後、王子は王位継承の地位を捨てて、出家され仏の境地を求め六年間の修行に専念されて、大自然の真理、又大いなる慈愛心に目覚められ「仏陀」と成られたのでした。

王子は、自ら経験された、様々な苦しみや悲しみのお陰で、人の傷みの解る、「仏心」としての大きい慈愛心に目覚める事が出来たのです。身近な人の「死」を如何に受け止めるか、これは、故人と成られた人は、たった一つの己の命を持って私達を導いて下さった。と受け止める事が出来た時、その命も御心も伝承されて生かされて参ります。

ある人が言っていました。「私が苦しみから救われるのではなく、苦しみが私を救うのです」と、苦しみや悲しみの経験が無にならぬよう勤めて参りたいと存じます。

合掌

人は、何の為に生きていくのか

NO.3



ねーねーお坊さん、前回、己を忘れて他の幸を願う人を菩薩と言う、と言ったけど、人の幸ばかり願っていたら、自分はずいぶん不幸な気がするんですけど、どうなんでしょう？

菩薩として生きる幸福



そうじゃな〜 この度のテーマ、「人は何の為に生きていくのか」この課題は、まだまだ三回目、仏の境地とか菩薩として生きる喜び、そして菩薩としての御心と言うのは、見えないのが当たり前、このような心境を得るには、様々な人生経験、時には挫折も必要なんじゃ、今から心配すること無いよ。

私自身も、まだまだ菩薩として生きる事が出来ないのじゃが、もし菩薩として生きる事が出来たなら、必ずみんな幸せになれると言う事が理論的に見えて来たのじゃよ。この年になって漸く生きる方向性が見えてきたと言う段階なんじゃ。

君は今から、みんなの幸せを願って生きていたら、必ず大いなる幸を得る事が出来るよ。菩薩として生きる幸福を、ほんの数十年前の大家族の生き方を

見てみると解りやすいので、一つのとえとして説明するね。

その家は、おじいさんが居て、おばあさんが居て、お父さん、お母さん、そして数人の子供さんが同居しているのじゃ。その家は数百年と言う歴史があり何代にも渡って家を守り命が継承されて来たのじゃよ。と言っても生活に余裕が有るわけでも無く、お父さんは家族の為に懸命に働き、それが生きる事の喜びと成り。同じようにお母さんは生活を切り詰めたがらも、家族の為にご馳走を造り子供の成長が喜びと成っていたのじゃ。

更に、心に余裕を持った祖父母は、些細な争いも大きな御心で暖かく包容してくれるので、家族は何時も大きな安心に抱かれていたのじゃ。

その家族は、みんな己を忘れて家族の幸を願い、家の繁栄を祈り家族の成長を生きる事の指針とし喜びとして知らず知らずの内に菩薩として生きて居たのじゃ。

その生活の中には、命を伝える安心も、そして受け継いだ命を無にしないよう生きる支えとする事も出来たのじゃよ。

しかし昨今は、家族は崩壊し生きる事の指針も喜びも、また命を伝える事も受け継ぐこともたれてしまったのじゃ。

「人は何の為に生きていくのか」と言うこの難題に対して、もし命を伝承する環境を築く事が出来たなら、身近な回答も見えて来ると思うのじゃよ。 亮観拝



日本仏教に登場する

仏様を毎号少しずつご紹介。
今回は天部の帝釈天を紹介します。

● 天部 帝釈天

「わたくし、生まれも育ちも東京葛飾柴又。姓は車、名は寅次郎…」の口上で有名な映画「男はつらいよ」シリーズゆかりの寺として登場し、「帝釈天」という名前は一度は聞いたことが有るかと思えます。

帝釈天とはヒンドゥー教に登場する「インドラ」という神様が仏教に取り入れられた姿を言います。

インドラは雨を降らし凄まじい雷を落とす雷霆神とされ、大地に実りを与える神と言われると共に、その力の強さから戦闘の神、最強の神という顔も持ちます。

そのため、仏教に取り入れられた際には力の神として受け入れられました。そしてインドラは帝釈天と名前を変え、その力の強さから仏教界



【国宝】京都府東寺 帝釈天騎象像

と仏教徒を守護する神様とされ、以前紹介した梵天と合わせて二大護法善神と呼ばれています。

帝釈天の特徴は、白い象に乗り鎧を着た姿に右手には独鈷杵という古代インドの武器を元にした邪気を払う道具を持ち、左手を腰に当てる姿をしています。

帝釈天は仏教の世界にそびえる須弥山という山に有るお城に住み、他の神様を統率すると共に、仏教界を守護する四天王を従えて山の上から人間界を監視をしています。

帝釈天は何を監視しているかというところ、殺生をしていないか、盗みを働いていないか、嘘をついていないか、親を大事にしているか、貧しい人を助けているかなど、時には使者を使って、時には四天王が姿を変えて人に紛れながら厳しく監視しています。

つまり、誰も見ていないと思っても天上界からばつちりと帝釈天が監視の目を光らせておりますので呉々も悪いことは行わないよう気をつけましょうね。

余談：寅さんで有名な柴又帝釈天ですが、正式名称は経栄山題経寺という日蓮宗のお寺で、本尊は帝釈天では無く、釈迦堂の隣に安置する仏の世界を表した「大曼荼羅」が本尊なんだそうです。

亮澄拝

行節ないました



朝夕はまだまだ冷え込むものの、立春を迎え暖かな日差しを感じる今日この頃、皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。

さて、去る二月三日東光院に於きまして節分会が執り行なわれました。一年を通じて最も多くの方がお参りになる節分会も今年で既に十七回目となり、小学生だった私も二回目の西年を迎えるまでになりました。

東光院の節分会では、一年の健康や安全を祈念して日数心経（般若心経）を総勢で三六五回、一人あたり三回お唱えして、手を合わせて参拝者の健勝を祈念致します。

その御心を豆に込めてから、豆まきを行ないます。ですから



御参拝頂いた皆様にも本堂に上がって頂き

二十分程度の短いお勤めではありますが、共に一層意義有る節分会となるものと思われます。

元々この、節分会は檀信徒の方々と栽培したおそばをご接待させて頂くと言う事から始まりましたが、今では大勢の方のご協力の元にとっても賑やかな行事となりました。

今回も福豆や野菜を奉納頂いた人、そして焼き鳥やおそばを打って下さる人に茹でて下さる人、更に舞台設営の準備に携わって下さった人々、皆様のご協力心より御礼申し上げます。

味噌の仕込みを行いました。

来年の節分会に向けて、自家製味噌の仕込みを行いました。東光院では大豆の栽培から麹の発酵、仕込みまで住職が試行錯誤しながら行っております。



毎年微妙に出来が異なるようすが、果たして来年、どのように仕上がるのか楽しみです。 亮敬拝